

学会資料の保存，創刊の辞にみる北里博士の意志

坂谷 光則

つい先日，小さめの新聞報道でしたが，日本の考古学会が所持する発掘記録が，その量が膨大なため保存不可能となり競売に掛けられ，英国の図書館に売却されそうになったとを知りました。小生の関与する分野のひとつである，職業性肺疾患「じん肺」の貴重な資料の宝庫であった「けい肺労災病院」が先年その使命を終え，一般地域病院に衣替えしましたが，二度と手に入らない画像と病理の資料は，とりあえずは関東地区の2つの労災病院に分けて保存されることになったとはいえ心細い話です。

結核関係の資料についても学会が中心となって，そろそろ収集と保存の方法を考えるべき時期にきているのではないのでしょうか。

本学会の機関誌「結核」は大正12年に創刊され，現在第86巻にまでなっています。先日その第1巻第1号の北里柴三郎会長による「創刊の辞」の全文を目にする機会がありました。それは3頁にわたる淡々と書かれた決意表明ですが，北里先生が敬愛する恩師コッホ博士の偉大な事業を追慕し継承して創刊するものであって，日本の学者も結核の予防と治療の研究を通じて救世の目的に副うよう努力すべし，と書かれています。文の中ほどに

はコッホ博士の結核菌発見の経緯と対比染色成功のエピソード，治療薬としてのツベルクリン精製の経緯，牛型結核菌は弱毒性であることなどと共に，当時ドイツの医学会では飛ぶ鳥を落とす権力者であったウイルヒョウ（病理学）博士におもねることなく，堂々と自説の正しさを世に問うたコッホ博士の姿勢をさりげなく紹介している部分があります。

結核対策は国家規模の事業で，医療と労働保健（衛生）の問題であり，官民協力して努力すべしといいながら，生涯にわたり権威者の圧力には敏感で，官製の組織に属することを避けて医学研究（科学研究）の自由独立性・公平性を重んじた北里博士の心情が押し量られる文章です。同じく北里博士が初代会長であった日本医師会には気骨あるその雰囲気は今に受け継がれているようですが，わが結核病学会はどうでしょうか。社会とのつながりが強い医学界の中でも，結核は政策医療の代表格として，政治や行政とも関連が強いのですが，学問としての結核病学を支える本学会は，本誌の発行事業を含め，社会的権威や官とは一線を画し，学会主体の自主独立・自由公正な存在でありつづけなければならないことは，自明の理でありましょう。